

日本型二言語教育を求めて

日本語獲得への道筋

第27回ろう・難聴教育研究大会報告書

B5判 124頁 1200円



刊行のことば ————— 伊藤政雄

日本語の獲得 これはろう学校の、昔から変わらぬ、目的であり使命でした。このことは、子育てや教育に手話が使われるようになって、変わらぬことです。

手話は、コミュニケーションの手段であり、かつ言語ですが、「書きことば」（文字）をもっていません。それに、聴覚障害児が日本社会を担う市民として生きるためには、日本語が不可欠です。「日本語の獲得」というかつてのろう学校の目的は、今は「手話と日本語の二つの言語の獲得」という、より拡大された目標になっているのです。

しかし、手話を使い始めた教師や親の方々の中には、手話を使うことによって今まで以上に子どもと通ずるようになった喜びを感じるとともに、さまざまな不安や戸惑いが生じていることも、事実です。その不安と戸惑いの中で、もっとも大きなものが、「日本語の獲得」ではないかと思います。

手話で話すときには、音声語を併用してはいけないのか。

手話を使って、ほんとうに、日本語の力が伸びるのか。

日本語はいつから使うのがよいか。

手話のコミュニケーションが十分できるようになるまでは、指文字や聴覚口話はしない方がよいのか。従来の聴覚口話の指導法は、無用になったのか。

日本語は、「読み書き日本語」に絞るべきなのか。話しことばは、不要なのか。

「日本手話」でなくてはならないのか。「日本語対应手話」ではだめなのか。

ろう・難聴教育研究会は、こうしたろう学校や聴覚障害児を育てている両親の問題意識に密着し、共に取り組んでいくことを、自らの課題と考えています。

そしてそのための方法の基本は、手話で子育てをした聞こえない親の体験から学ぶ、ろう学校での手話をベースとした日本語指導の実践から学ぶ、聴覚障害者の手話言語体験から学ぶ等々、実践から学ぶことです。

27回研究大会は、「日本語の獲得」に関する、教師や親の不安や戸惑いに答える内容がぎっしり詰まっていたと、自負します。その内容が、今ここに『報告書』として刊行されました。聴覚障害児の子育てと教育の環境をよくするために、一人でも多くの聴覚障害教育関係者に、この冊子が読まれることを願っています。

目次

手話の早期導入と聴覚・口話の新しい役割……	中井弘征
日本手話による絵本の読み聞かせ……	那須善子
乳幼児期からの手話使用と日本語獲得……	南村洋子
遊びの中から見えてきたこと……	笹間祥介+長谷川純子
手話使用と日本語・教科の指導……	上農正剛
映像を使つての国語授業の進め方……	早瀬憲太郎
〔パネルディスカッション〕日本語獲得への道筋	
中井弘征+南村洋子+上農正剛+早瀬憲太郎+伊藤政雄	
……………(司会 長谷川洋+前田芳弘)	

御注文 = ろう・難聴教育研究会 (旧TC研)

FAX 03-5397-6562 (南村) メール hiroko-m@h-and-c.jp (南村) 携帯 090-6035-4686 (矢沢)

郵便振替 口座名 = ろう・難聴教育研究会 (旧TC研) 口座番号 = 00110-2-314972